

## I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間には「どうしてよいかわからないときに、どうしてよいかわかる」<sup>(a)</sup>能力が潜在的に備わっています。その能力は資源がじゅんたくで安全な環境では発達しない。<sup>(1)</sup>「どうしていいかわからない」<sup>(1)</sup>ときにでも、「どうすればいいか」<sup>(1)</sup>を訊きに行く人がいたり、必要なものを買って足しに行けるなら、先駆的に知る必要はない。けれども、資源が乏しい環境や、失敗したときに「リセット」することが許されないタイトな環境においては、「どうしていいかわからないときにも適切にふるまう」<sup>(1)</sup>ことが生き延びるために必須のものになる。

「学び」という営みは、それを学ぶことの意味や実用性についてまだ知らない状態で、それにもかかわらず、これを学ぶことがいずれ生き延びる上で死活的に重要な役割を果たすことがあるだろうと先駆的に確信することから始まります。「学び」はそこから始まりません。私たちはこれから学ぶことの意味や有用性を、学び始める時点では言い表すことができない。それを言い表す語彙や価値観をまだ知らない。その「まだ知らない」ということがそれを学ばなければならない当の理由なのです。そういうふうな順逆の狂った仕方で「学び」は構造化されています。

「学ぶ力」というのは、あるいは「学ぶ意欲(インセンティブ)」<sup>(b)</sup>というの、「これを勉強すると、こういう『いいこと』がある」という報酬の約束によってかたちづくられるものではありません。その点で、私たちの国の教育行政官や教育論者のほとんどは深刻な勘違いを犯しています。子どもたちに、「学ぶと得られるいいこと」<sup>(b)</sup>を、学びに先立って一覽的に開示することで学びへのインセンティブが高まるだろうと彼らの多くは考えていますが、人間というのはそんな単純なものではありません。「学ぶ力」「学びを発動させる力」はそのような数値的・外形的なベネフィットに反応するものではありません。<sup>\*</sup>

「学ぶ力」とは「先駆的に知る力」のことです。自分にとってそれが死活的に重要であることをいかなる論拠によっても証明できないにもかかわらず確信できる力のことです。ですから、もし「いいこと」の一覽表を示されなければ学ぶ気が起こら

ない、報酬の<sup>(2)</sup>かくしようが与えられなければ学ぶ気が起こらないという子どもがいたら、その子どもにおいてはこの「先駆的に知る力」は<sup>(3)</sup>すいびしているということになります。私たちの時代に至って、日本人の「学ぶ力」(それが「学力」ということの本義ですが)が劣化し続けているのは、「先駆的に知る力」を開発することの重要性を私たちが久しく<sup>(4)</sup>かんきやくしたからです。

今の子どもたちは「値札の貼られているものだけを注視し、値札の貼られていないものは無視する」ように教えられています。その上で、自分の手持ちの「<sup>(5)</sup>かへい」で買えるもつとも「値の高いもの」を探しだすように命じられている。幼児期からそのような「<sup>(c)</sup>賢い買い物」のための訓練を施された子どもたちの中では、「先駆的に知る力」はおそらく<sup>(4)</sup>萌芽状態のうちに摘まれてしまうでしょう。「値札がついていないものは商品ではない」と教えられてきた子どもたちが「今はその意味や有用性が表示されていないものの意味や有用性を先駆的に知る力」を<sup>(d)</sup>発達させられるはずがない。

けれども、この力は資源の乏しい環境の中で(ということとは、人類が経験してきた全歴史のほとんどにおいて) <sup>(d)</sup>生き延びるために不可欠の能力だったのです。この能力を私たち列島住民もまた必須の資質として選択的に開発してきました。狭隘で資源に乏しいこの極東の島国が<sup>(c)</sup>大国強国に伍して生き延びるためには、「学ぶ」力を最大化する以外になかった。「学ぶ」力こそは日本の最大の国力でした。ほとんどそれだけが私たちの国を支えてきた。ですから、「学ぶ」力を失った日本人には未来がないと私は思います。現代日本の国民的危機は「学ぶ」力の喪失、つまり辺境の伝統の喪失なのだ<sup>(d)</sup>と私は考えています。

(内田 樹『日本辺境論』による)

\*ベネフィット—benefit 利益。

問一 傍線部(1)～(5)を漢字に直しなさい。

問二 傍線部(a)「どうしてよいかわからないときに、どうしてよいかわかる」とはどのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(b)「深刻な勘違い」はどうして「深刻」なのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(c)「『賢い買い物』」はどういうことを意味するのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部(d)「生き延びるために不可欠の能力」はどうして「不可欠」とされるのか、その理由を説明しなさい。

## II

次の文章は、野坂昭如あきひろの小説「夏わかば」の一部です。一九四五年夏に父母を空襲で亡くした少年は、一時身を寄せていた親戚せきの家にも居づらく、廃棄された「砲台」の中で寝泊まりするようになる。ある昼下がり、偶然にそこをのぞきこんできた「美少女」の出現にとまどう。以下は、少年のそれまでの経緯が語られた後、少女との触れ合いが続く部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい(文中、作者独特の表現が用いられている箇所がある)。

今、七月の半ばで、これから八、九と月がめぐり、寒い冬が、焼跡に訪れるなど、信じ難い。数多くの死者を身近かにしながら、あるいはしたからこそか、少年に死の実感はなかった。死者のほとんどが、黒い達磨だるまの如きもので、以前人間の姿をしていたとは、どう考えても納得できず、しかし、少年の家の焼跡から、二つの焼死体があらわれて、それを両親の遺体と大人たちが認定し、「えらい変り果てたお姿やけど、きつと極楽行かはずたわ、ええお父さんお母さんやったもんなあ」町会長が、焼け出されにしては用意がよく、数珠じゆずをくって礼拝したが、少年はそっぽ向いていた。このての焼死体は、焼跡でいくらかも見たし、いずれもよく似ているから、焼けトタン白い便器水道の鉛管と同じ、いわば焼跡のつきものといった感じで、それより、十何年か暮らしてきた自分の家が、焼けてからみると、びつくりするほどせまい面積であるのにショックを受けた。

こんなせせこましいところにおったんか、余熱ふくんだ瓦礫がれきの上を歩いてたしかめるうち、そこでの生活が覚めて後の、夢の如く手ざわりうすくなって、今日一日過ごしたと同じように、明日の日を送ると、確信の持てた、いわば連続していた日々から、断ち切られたとたん、少年の生活そのものが、事実変転をきわめたのだが、明日すらが、ひどく遠く思える。

明日など、やって来ない、眼が覚めたら、といういい方もおかしいが、気がつくとも自分もあの炭の達磨だるまになっていてはないか、と、そこまでは考えないが、なまじ屋根の下の畳の上にいると、なお、明日はやって来ない実感が強まるのだ、家があるから焼ける、焼跡なら、焼夷弾しょういだんも降りかからぬと、そう冷静に思い定めたわけでもなかった。しかし、自分が住んでいなくても、焼け残って、静かなたたずまいみせる家並みを過ぎる時、<sup>(1)</sup>少年は心がざわつき、風景そのものが不安定に見えた、

そして、通りすがりの者に、炭の達磨と化したその姿を思い、あつげらんかと笑い、しゃべるのが、不思議だった。

少年が伯母の家から南へ向い、海岸に出たのは、その近くに焼跡がないためと、三年前まで、そこは賑やかな海水浴場、何度か泳ぎに来て、覚えがあったからだ、夏草のあいまぬって心細い流れの、川に沿っていくつもの線路を越え、左右に松林の広がる先きが、砂浜で、砂浜にも海にも、目路さえぎる何物もなく、少し前までは、海の上空をB 29しきりに行きかったのだが、目標を地方都市に移したらしく、このところ来襲は艦上機に限られていた。

砂に寝るのは、しごく楽だろうし、波打際にはかなり大きな木片が流れついている、水は近くの病院で貰えばいいと決め、川口から東へ歩くうち、少年はこの砲台を発見したので、まばら松の間に、建物があると、遠くから分っていたが、近づくといかにも異様な印象。縦横厚さいずれも一米ほどの御影石を、円筒形に積み上げて、ヨーロッパの山城にむしろ似ていた。

円筒の直径は十米ばかり、高さもほぼ同じで、上部に丁度石一つ分だけ、等間隔に十二穴があいている、入口はしごくせまく、以前、鉄柵がとりつけられていたのを、供出したのだろう、今は金具だけ石にはめこまれ、防空壕あるいは倉庫に見立てても、角石の縁すべて風化し、ところどころ残った漆喰の様子などあまりに年代を経てみえる。そのうち少年は、国民学校の教師に歴史の好きな一人がいて、乙女塚と呼ばれる西国街道沿いの古墳に生徒をひきつれ、昔屋の乙女にまつわる物語をきかせたついでに、この砲台にもふれたことを思い出した。つまり、幕末の頃、内海へ入りこむ黒船邀撃の目的で造られた砲台が残っていて、乙女塚と同じく地元の人も、由来を知らずにいるといい、その砲台はなまじ西洋風に、天蓋をつくり密閉し、硝煙のがす工夫を忘れて、だから試射したところ、たった二発で中にいる者は窒息し、実用にならぬと、そのまま廃棄されたのだそうだ。

十二の穴は、砲眼なのだろう、内部はえたいの知れぬがらくたが散乱していたが、なによりここをとりあえずの宿りと決めたのは、御影石の頼もしい厚みのせいだった。親戚の家にて警報をきくと、手近かのやわな塚に目もくれず、遠方の横穴あるいはコンクリート造りに逃げ込み、これがまた臆病といみ嫌われたのだが、あの矢ぶすまの如く降りかかる焼夷弾を考える

と、いかに盛土厚くとも、道端のそれに入る気はしない。ふだん道を歩いていて、目につく壕をいちいち品定めし、ガードや橋の下も、空襲の際に、安全かどうか確かめる癖が付き、その点からすると、この砲台は完璧だった。松林の中にあり、御影石の表面は風化して、あたりの砂と同じ色合いだから、発見されにくいだろうし、五十キロ爆弾なら、直撃でも十分耐えるはず、五十キロから一トンまで、少年はその破壊力について、精確な知識をもっていた。

だから、少女に頑丈そうといわれて、ようやく気をとり直し、口ごもりつつ砲台のいわれ、堅牢さについての推測を語り、少女はいちいちうなずいて、あげく「あんた、ここもう長いこと住んではるん？」「そんなことないけど」「焼け出されたん？」何時、何処でと紋切型の質問をし、男の子が一人こんなところで暮すとなれば、およその事情察しがついたか「おもしろい？」しめつぽくなりそうな話題はぐらかすつもりで、<sup>(1)</sup> 剽軽にたずねると、少年がひどく無邪気に笑い、「蚊アすごいねん、砂にうまって寝んとな」実際、夜に入り潮騒と松をわたる風の音で、そう静寂というわけでもないのに、蚊の羽音はそれらを圧して耳を聳するほど、だけならいいが、刺すから、暑いのに毛布をかぶり、砲台の床は、砂といっても土に近くしまつていたから、とてももぐれなかつたけれど、出来るならそうしたいくらい。

「蚊帳ないの？」「疎開してある思うけど、とりにいくの面倒やし」「一つもって来たげよか」二人いつか波打際まで歩いて、少年答えるかわりに、服を脱ぐと石を投げて水切りさせる。「七、八、九、十、十一」少女早口に生物の如くゆるやかなうねりの上をとぶ、そのバウンドを数え、「太腕」といった。

少年は二年まで、機械体操の選手で、体格に自信はあったが、こうあからさまな賞め言葉ははじめて、なお面くらい「大丈夫や、もう免疫なった」「うっとこ余ってるねん、遠慮せんかて」少女も水切りを真似、幾度やつてもずぶつと沈んでしまふ、「なるべく平たい石がええわ」少年えらんで手渡し、投げた瞬間、スカートがひるがえって膝の裏の、あらわとなるのを、まぶしくながめる。

「あら乗らへん？」少年は、川口に近いあたり、シーソー滑り台などあり、それはこわれているが、回収まぬかれたのか柱に支えられた鉄製の輪が残っていて、指さす。「何？」「あんた乗ったら、ぼくまわしたる」「怖いことない？」「落ちたつて砂

やもん」少女ににらまれて、少年<sup>(4)</sup>だらしなく頬<sup>ほお</sup>のゆるむのを、必死でひきしめ、するとかえって妙な顔になったのではないか  
 気になり、「さ、怖いことない、そんな早<sup>はや</sup>うまわさへんもん」錆<sup>さび</sup>びついているとみえ、きいきいきしんで動かないのを、満身  
 の力こめて押し、下は砂地でもすれば足がすべり、「ヨイシヨ、ヨイシヨ」少女掛声をかけた。

ようやく廻<sup>まわ</sup>りはじめ、勢いこんで力ゆるめず、押しつづけていると、「いやあ、やめて、やめてえ」半ば本気の悲鳴が上つ  
 て、手をはなすと、少女はあおられて、脚あらわとなりそうなるスカートの裾<sup>すそ</sup>を、片手でおさえ、支えの棒にかじりついてい  
 る、少年の前を過ぎる時、「あかあん」困り切った表情でいい、ことさらたくらんだと思いはしないか、少年心配になり、体  
 ごとぶつけて廻<sup>かいてん</sup>転をとめると、少女そのシヨックで、ほうり出されるように砂に降りて、危く輪に体を支え「乱暴やわあ」  
 掌<sup>てのひら</sup>についた錆<sup>さび</sup>をはらい、スカートをぼんぼんとたたいた。

\* 焼夷弾―飛行機から投下して火炎によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾。

\* B 29―アメリカの爆撃機。

\* 防空壕―空襲から身を守るため、地面などを掘って作る穴。

\* 芦屋の乙女にまつわる物語―二人の男性に慕われた娘が自ら矢の犠牲になってなくなる話。万葉集に見られる。

問一 傍線部(1)において、少年はなぜそのような状態になったと思われるか、考えを述べなさい。

問二 傍線部(2)において、砲台のことをなぜ少年は「口ごもりつつ」語ったのか、考えを述べなさい。

問三 傍線部(3)のように語った少年の心情はどのようなものだと読み取れるか、考えを述べなさい。

問四 傍線部(4)において、なぜ少年の頬がゆるむのか、考えを述べなさい。

問五 少女はこの少年に対して、どのような思いで接していたと思われるか、考えを述べなさい。

## III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かくて四条の大納言殿は、内の大殿の上の御事の後は、よろづ倦<sup>(ア)</sup>じはて給ひて、つくづくと御おこなひにて過ぐさせ給ふ。

法師と同じさまなる御ありさまなれど、「これ思へばあいなきことなり。一日にても出家の功德世にすぐれめでたかんなるも

のを、今しばしあらば、御匣<sup>(ミ)</sup>殿の御事など出で来て、いとど見捨てがたく、わりなき御絆<sup>(ホ)</sup>にこそおはせめ。さらば、このほ

どこそいとよきほどなれ」とおぼしとりて、人知れずさるべき文ども見したため、御庄の司ども召して、あるべき事どもの給

はせなどして、なほ今年とおぼすに、女御の、なほ人知れずあはれに心細くおぼされて、「人の心はいみじういふかひなきも

のにこそありけれ。などておぼゆべからん」といと我ながらも口惜しうおぼさるべし。「何事かはある」とおぼしまはしつ

つ、人知れず御心ひとつをおぼしまどはすも、いみじうあはれなり。この御本意ありといふことは、女御殿も知らせ給へれ

ど、いつといふことは知らせ給はず。

かかるほどに、椎<sup>(シ)</sup>を人の持て参りたれば、女御殿の御方へ奉らせ給ひける。御筥<sup>(ハ)</sup>の蓋<sup>(カ)</sup>を返し奉らせ給ふとて、女御殿、

A ありながら別れむよりはなかなかなくなりたるこの身ともがな

と聞え給ひければ、大納言殿の御返し、

奥山の椎がもとをし尋ね来ばとまるこの身を知らざらめやは

女御殿、いとあはれとおぼさる。

かくて大納言殿は、さぶらふ人々などの、ひとへに頼みきこえたるをぞ、いとあまた見捨てがたくおぼさるにつけても、

あはれにのみおぼされて、まだきにかくいふことを知らせじとやおぼしけん、のたまふやうは、「長谷<sup>(ナガタ)</sup>に堂建てんと思ふに、

北に当りたればいと恐ろしければ、かの寺に年の内に行きて、四十五日そこにて過ぐして、来年の二月ばかりなん京に出づべ

き」などいふことをの給はせつつ、よろづにあべいことをおぼし掟<sup>(オ)</sup>てければ、弁<sup>(ヒ)</sup>の君よりはじめ奉りて、たださのみおぼした



り。<sup>\*</sup>わが御乳母<sup>めのと</sup>の、年いみじう老いて、さるべき人々にも後れて、ただひとへに殿を頼み奉りたるぞ、あるが中にもあはれにいみじうおぼされける。それもこのごろは、はかなきこともあはれにせさせ給ふ。<sup>\*</sup>尼上も<sup>\*</sup>二条殿にぞ、このごろはおはしましける。

(『栄花物語』による)

\* 四条の大納言殿―藤原公任。

\* 内の大殿の上の御事―内大臣殿の北の方であった公任の娘が亡くなったこと。

\* 御匣殿―内大臣殿の娘で、公任の孫。

\* 女御・女御殿―花山院の女御で、公任の姉妹。

\* 椎―椎の実。

\* 弁の君―藤原定頼、公任の子。

\* わが御乳母―公任の乳母。

\* 尼上―公任の妻。

\* 二条殿―内大臣殿の邸宅。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)の語の意味を述べなさい。

問二 傍線部(a)・(b)を現代語訳しなさい。

問三 傍線部①の「よきほど」とはどのようなことか、具体的に説明しなさい。

問四 傍線部②は、誰のどのような気持ちをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 Aの和歌には「女御殿」のどのような気持ちがあらわれているか、説明しなさい。

IV

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、返り点や送り仮名を省略した部分があります。

滄州李仲実、行年六十有六、生二次子、曰奈驢。四歳能弁字之偏。

旁若夙習者。大徳四年二月、仲実生朝、对衆戯之、曰「汝既幼

慧、我今老。汝能寿吾一詩乎」。其子、前此未之習、即応声曰

父年七十四、筋力未全。

(あ) 一。

但願長太平、金石同寿考。

時年九歳。座中咸驚異焉。

蘭軒曰「余聞天地有清明靈異之氣、鍾而為人、則為哲、為賢。

然是氣也、遇之為甚難。故古今賢哲之士、或間世而一現。然

或鍾是氣而有其質、顧乃學問之功不至、而終于常人者、亦有

之。<sup>さきノ</sup>前金時、<sup>ニ</sup>以神童<sup>ヲ</sup>称<sup>サルル</sup>者<sup>ハ</sup>蓋<sup>シ</sup>四人。厥<sup>ソ</sup>後唯<sup>ダ</sup>麻九疇<sup>キョウチュウ</sup>知<sup>ラレ</sup>名<sup>ヲ</sup>於<sup>ラ</sup>天下<sup>ニ</sup>、  
 余<sup>ノ</sup>三人者、無<sup>シ</sup>聞<sup>コユル</sup>。豈<sup>カ</sup>非<sup>ニ</sup>学<sup>ヲ</sup>与<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>学<sup>之</sup>故<sup>ニ</sup>歟。<sup>(5)</sup>今李氏子、不<sup>シテ</sup>由<sup>ラ</sup>師<sup>ノ</sup>資<sup>ヲ</sup>、  
 於<sup>テ</sup>文字<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>夙<sup>ノ</sup>習<sup>ノ</sup>。是<sup>レ</sup>稟<sup>ウケテ</sup>氣<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>靈<sup>異</sup>而有<sup>スルモノナリ</sup>。賢<sup>哲</sup>之<sup>ヲ</sup>姿<sup>ヲ</sup>。可不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>其<sup>ヲ</sup>。  
 難<sup>シ</sup>遇<sup>ハ</sup>、而<sup>シテ</sup>成<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>学<sup>問</sup>之<sup>功</sup>。仲<sup>實</sup>勉<sup>メ</sup>之<sup>ニ</sup>、幸<sup>ナ</sup>不<sup>レ</sup>下<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>余<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>為<sup>サ</sup>過<sup>ト</sup>。<sup>(6)</sup>

(元・王旭『蘭軒集』による)

\*行年—それまでに経た年数。

\*弁字之偏旁—文字を区別する。

\*夙習—以前に学んだことがある。

\*大徳四年—西暦一三〇〇年。

\*生朝—誕生日。

\*慧—かしこい。

\*能寿吾一詩乎—私を祝う詩を作ることができるか。

\*金石同寿考—「金石」は金属と石、「寿考」は長寿。

\*蘭軒—作者王旭の号。

\*前金—前の王朝の金。

\*麻九疇—人名。

問一 空欄 (あ) に入る適切な漢字を、次の1〜5から選び、記号で答えなさい。

- 1 老
- 2 弱
- 3 衰
- 4 疾
- 5 変

問二 傍線部(い)「然是氣也、遇之為甚難。故古今賢哲之士、或間世而一現」を平易な言葉に訳しなさい。

問三 傍線部(う)「豈非学与不学之故歟」を、すべて平仮名で読み下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問四 傍線部(え)「可不思其難遇、而成之以学問之功」は、「そのあひがたきをおもひ、これをなすにがくものこうをもつてせざるべけんや」と読みます。この読み方にしたがって、解答欄の原文に返り点を付けなさい。

問五 傍線部(お)「仲実勉之、幸不以余言為過」の意味を、問題文全体をふまえて、わかりやすく説明しなさい。